



Title	英国ルネッサンス期パジェントリのシェイクスピア史劇にたいする影響
Author(s)	藤田, 実
Citation	大阪大学, 1974, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31035
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	ふじ 藤	た 田	みのる 実
学位の種類	文	学	博 士
学位記番号	第	3 1 1 6	号
学位授与の日付	昭和49年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
学位論文題目	英国ルネッサンス期パジャントリのシェイクスピア史劇にたいする影響		
論文審査委員	(主査) 教授	村上 至孝	
	(副査) 教授	田中 健二	教授 毛利 可信

論文内容の要旨

本論文は、英国ルネッサンス期に頂点を迎えたパジャントリの伝統がエリザベス朝劇場の舞台構造に与えた影響を考察し、パジャントリの舞台とその演出法が、当時上演された形態でのシェイクスピア史劇に与えた影響の諸要素を明らかにしたのち、脚本5編を仔細に検討し、シェイクスピア劇のうち今日では見失なわれている表現と主題とを、当時の舞台を基礎にして再構成し、シェイクスピア劇が当時の観客に対して有していた意義を再評価したものである。本文は7章21節(280頁)より成り、パジャントリを写した挿絵10葉を添えている。

I Introduction. 英国ルネッサンス期のパジャントリを、国王の地方巡幸とロンドン入り、ロンドン市長就任式祝典、馬上槍試合などの行事における非劇場性の演劇形態と規定し、初期英国劇に見られるパジャントリ的な性格を考察する(i)。次に、エリザベス朝劇場舞台、シェイクスピア劇、およびルネッサンス文化に関する研究の最近の動向をふまえて、パジャントリ研究が持つ重要性を浮彫にする(ii)。さらに、エリザベス朝舞台とそこに上演された演劇とを、パジャントリの影響の面から再構成する歴史主義的研究の方法が、現代のシェイクスピア学において重要な役割を担うことを示す(iii)、(iv)。

II The Elizabethan Stage and Shakespeare's Historical Plays. パジャントリの伝統的舞台表現の審美性および、シンボルやエンブレムの使用による象徴的表現が、エリザベス朝舞台の構造と性格に与えた影響を考察した(i)のち、シェイクスピアの史劇において場面の左右対称性および儀式性が、パジャントリの影響とエリザベス朝舞台の性格とによって決定され、史劇的表現の重要な部分を構成していることを論じる(ii)、(iii)。

III A Study of "Triumph" in Richard II. 古典的「凱旋式」の概念がルネッサンスに復活し、さらにそれがシェイクスピアの想像力と結合してこの史劇の大きい主題の一つを構成している点を解明する。まず、第1幕第3場が中世以来の伝統的パジャントリの催しである「トーナメント」の舞台化

した場面で、エリザベス朝ではもっぱら「トライアンフ」という名称で呼ばれたものであることを実証し、かつティリアードの指摘する「中世的思想・風習」がエリザベス朝演劇の中ではなお生きた伝統であることを考察する(i)。次に、古代ローマの「凱旋式」からルネサンス期のダンテ、ペトラルカの詩において「凱旋式形式」が成立し、次いで戦車(チャリオット)を中心とする絵画や、戦車を用いて凱旋式を象った行列の流行が生まれ、さらにそれらが英国に入ってパジャントリの伝統と結合してゆくことを実証する(ii)。そして「凱旋式形式」の中心に来る戦車が演劇化され、エリザベス朝の舞台で主人公の栄光と悲劇的没落という主題に結合することを論じた(iii)あと、この「トライアンフ」が『リチャード二世』第5幕で多様に言及されていることにより、この劇の主題の展開に含蓄豊かな表現が加えられ、また次の史劇である『ヘンリー四世』二部作の準備がなされていることを論証する(iv)。

IV Rejection of Falstaff in the Henry IV Plays. 従来倫理的、政治的に理解されがちであった皇太子ハルのフォールスタフ棄却の場面とその意義を、パジャントリの舞台に固有の審美的表現の一典型として分析することから、この場面の審美的解釈の妥当性を証明する。まず、シェイクスピア史劇の扱う「キングシップ」の観念が演劇的にはパジャントリの伝統で成立した審美的観念に相当することを証明し(i)、「ロイヤル」という英国ルネサンス期の審美的観念が、いかなる様相で史劇の場面のスペクタクルと言語とに反映しているか、それがパジャントリの美的伝統にいかにか深く結合したものであるかを示す。パジャントリは、国王がその至上の華麗美を民衆の眼に提示する「はれ」の機会であり、民衆は日常性を越えた美に驚歎し、感激した。こうして生まれ育まれた美の観念がエリザベス朝舞台の観客に受けつがれ、国王とは人々が「驚きの眼で見る」対象となっているのである(ii)。次にいわゆる「棄却の場」を考察するに先立ち、シェイクスピアの史劇の結末部でパジャントリの演劇上の祝福的効果が決定的に重要で、かつ有効に使われていることを論証した(iii)あと、この場面にパジャントリの国王巡幸が有効に舞台化されていて、それが皇太子ハルの改心の予言に見る「雲間からふいに太陽が現われ出る」という審美的効果を、演劇的規模で舞台上に表現していることを論じる。この「雲間からふいに太陽が現われ出る」というスペクタクルの型はルネサンス絵画にしばしば見られると共に、パジャントリの舞台でも繰り返し示されたものであり、この点から史劇の終幕のパジャントリ的効果の重要性を証明する(iv)。

V The Dumb Show in Macbeth. 『マクベス』の中心的場面である第4幕第1場において主人公をめぐる心理的リアリズムの主題から歴史的主題への転換があるが、この場面の見事な効果が、「舞台上の行列」を中心とする黙劇に求められることを論証する。この場面はエリザベス朝舞台でシェイクスピアが彼の史劇において有効に用いた黙劇を基本的な型としており、かつ、それがパジャントリの舞台からエリザベス朝の劇場舞台に移入された表現形式であり(i)、この黙劇のスペクタクルとしての形式は、史劇における「キングシップ」の主題の表現と密接に関連している。なお、この形式はエリザベス朝舞台で固有の価値を有していたが、清教徒による劇場閉鎖があり、その後再開された王政復古期の舞台ではその本来の重要な機能と意義とを失ったのである(ii)。

VI The New “Cydnus” in Antony and Cleopatra. このローマ史劇の重要な各場面におけるパジャントリの影響を考察する。その導入部の場面は、行列形式での登場という舞台の型を土台にし

ており、それがこの史劇の審美的主題を提示している(i)。パジャントリの舞台の構造やエリザベス朝舞台の性格から、「記念碑の場」が舞台空間による象徴的表現と結びつく可能性を探る(ii)。アントニー、クレオパトラ一行登場の最初の場は、ファイローの台詞に示されるように、両主人公の高貴性を観客の視覚を通して訴えており、これは自決の最終場面での衣裳による「最上の晴着」の効果に対応するものであり、「王座の場」における「ロイヤル」という美の観念が、キドヌス河を船でゆくクレオパトラの絢爛たる映像と結びついて、新しい理念的な「キドヌス」の観念を創造している。このキドヌス河の情景はエリザベス朝の水上パジャントの美観と結び合っており、パジャントリの審美的伝統を基礎としてエリザベス朝舞台で美の理念的表現が構成され、それがこの劇の形而上的主题と見事に結合している(iii)。

論文の審査結果の要旨

本論文はパジャントリの美的伝統、エリザベス朝劇場舞台の構造と本質的性格、シェイクスピアの歴史劇の舞台表現と主題、この三者の間の強固な関連を実証した着実かつ独創的な研究である。換言すれば、ルネサンス研究とシェイクスピア研究とを、ルネサンス・パジャントリの考察を軸として新しく結合したものであり、これまでシェイクスピアの演劇をエリザベス朝の演劇伝統や舞台という「場」から切り離して、登場人物の性格、プロットとアクションの流れ、あるいは詩句の美しさ、作者の人生観、神話的構造等々の観点から論じがちであった多くの研究の欠を補うものである。ここで取上げられた各脚本の分析は精密周到であり、例えばリチャード二世とハル皇太子の相違、フォースタフ仲間の服装と新王行列との対照、『マクベス』第4幕第1場以降430行にわたる主人公の不在、クレオパトラの死後「ロイヤル」なる語の頻出など細部についても首肯すべき鋭い指摘が見られる。本論文がシェイクスピア劇をエリザベス朝舞台の演劇空間の表現として捉え、パジャントリの伝統の再評価を提唱し、エリザベス朝舞台のエンブレムの表現に注目し、プロットよりも「場」の総和としてシェイクスピア劇の意義を明らかにしたことは特に優れた功績であり、学界に寄与するところ極めて多大と考えられる。重厚正確な英文で書かれており、海外の反響も期待される。

ただし本論文にも遺漏がないわけではない。第一フォーリオー(1923年)におけるシェイクスピア脚本の分類は妥当なものとして今日もそのまま踏襲されているが、その中で史劇に組み入れられている10編のうち本論文が正面から取上げているのは『リチャード二世』、『ヘンリー四世』第1、第2部、例証的に論じているのは『リチャード三世』、『ヘンリー五世』の5編であり、一方悲劇の部に属する『マクベス』と『アントニーとクレオパトラ』とがここで仔細に検討されている。むろんこのこと自体は何ら咎めらるべきことでなく、『マクベス』はむしろ史劇に入れるべきだとの説は有力であり、『アントニーとクレオパトラ』も有名な歴史的事件を素材にしているが、『ジョン王』、『ヘンリー六世』第1、第2、第3部、『ヘンリー八世』などを省いて代りにこの2編を取上げたことについて何らかの説明がないと、表題との食い違いに戸惑いを感じる。また、パジャントリの影響はシェイクスピア劇全体でなく特に史劇において著しいとすれば、その点について若干の注釈が望ましい。さら

に、パジャントリそのものについては「序論」で詳細に検討しているが、シンボルとエンブレムとの相違、ならびにそれぞれの具体的実例、についての説明がやや不足している。しかしながら、これらはいわゆる白玉の微瑕であって本論文の本質的価値をいささかも減ずるものではない。

以上の観点から本論文は文学博士の学位を授与するに十分適格であると認定する。